

近現代史部会高木報告によせて

中島 三千男

一

昨年九月十九日の天皇の重体に始まる、天皇の「代替り」は、戦後の歴史研究が、戦後の天皇制の問題を含めた現代天皇制を分析する視角や方法を必ずしも十分に持ちえていなかったことをはじめ、歴史学研究にいくつかの課題をつきつけたが、その中に、個別的な問題としては「代替り」儀式そのものの研究がほぼ全くといってもなされてこなかったということがあった。

こうした中であって、「明治維新と大嘗祭」（『日本史研究』三〇〇号）を中心とする一連の論考によって、明治維新期の「代替り」儀式の特質を、東京「奠都」という政治的契機によって解体されていた、朝廷の畿内における在地とのつながりや畿内を中心とする宗教的秩序とのかかわりで明らかにしてきた高木氏の存在は、たいへん貴重なものであった。

とりわけ、今回の「代替り」儀式の挙行にあたって、政府は、戦前の天皇主権下において制定された一連の皇室令

に準拠したが、それを正当化する論理として一貫して堅持したのが、「皇室の伝統」というものであった。この「皇室の伝統」という虚偽の論理を剥ぐ上で、高木氏の、幕末における大嘗祭をはじめとする「代替り」儀式が（朝廷の畿内における在地とのつながりや畿内を中心とする宗教的秩序（神仏習合を含む）を不可欠の前提として行われていたこと、そして、明治天皇の維新期の「代替り」儀式がそうした「伝統を断切って、挙行されたものであることを明らかにしたことは、非常に有効なものであった。

二

さて、高木氏の今回の大会報告は、明治維新期の「代替り」儀式の以上に述べた特質を踏まえた上で、一八八〇年代の皇室儀礼をめぐる議論、とりわけ一八八九（明治二二）年に発布される皇室典範第一条「即位ノ礼及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ」、の成立の問題に焦点をあてたものである。

周知のように明治天皇の場合、即位の礼は京都で挙行されたが、大嘗祭は有史以来はじめて東京で挙行された。これらの維新期に挙行された明治天皇の「代替り」儀式は、全体として、その後の近代の「代替り」儀式の議論に強い影響力をもつのだが、それが何故、皇室典範において即位

礼とともに大嘗祭の京都挙行を規定したのかは、今日の大嘗祭京都挙行論をまつまでもなく、一つの興味ある論点であった。

高木氏の報告は、この点につき次のような論理を展開している。まず、維新期の「代替り」儀式の特質を浮彫りにした、維新政府の、朝廷と畿内を中心とする在地との繋がりや、畿内の宗教秩序の解体政策は基本的には一八七七（明治一〇）年まで続くが、同時にこのころから、逆に京都・畿内における「旧慣」保存の動きが始まるとする。それは京都御苑の整備や畿内の社寺の保存や近世の儀礼の復興といったものだが、この発端は一八七七・七八（明治一〇・一一）年の明治天皇の京都行幸であり、この明治天皇の「旧慣」保存の意向は、懐かしさから始まった「復古」的なものであったとする。この流れと一八八一（明治十四）年の岩倉の「憲法大綱領」に始まる憲法と分離された皇室典範制定過程とが結び付く。とりわけ、維新以来、一貫して「旧慣」保存に熱心であった岩倉と在露公使を勤めた柳原前光の役割を重視し、とくに、柳原前光の西欧のロシア・オーストリアに学んだ「旧慣」保存策、大嘗祭京都挙行論に限定すれば、ロシアにおける「政治的首都」ペデルブルグに対して、戴冠式を行う「聖なる都市」モスコの区分は、「復古」的でない大嘗祭京都挙行論の正当性を与えた、と

いうものである。

そして、岩倉・柳原らのこうした皇室儀礼における「旧慣」保存策は、国内的には民心収攬の意図があったし、国際的には日本が西欧に比肩する先進国となるための、皇室の権威伸長という二つの意図があったとする。

こうした論点は、今日の、大嘗祭を含む「代替り」儀式を、日本の文化伝統ととらえるジャーナリズムを支配している論理への有効な批判となっている。それは第一に大嘗祭を含む「代替り」儀式が、戦前の天皇制イデオロギーを国民に浸透させる諸装置、日の丸や君が代、あるいは御真影等とともに、その多くが決して純粹に日本の文化的伝統ではなく、むしろ西欧の近代国民国家の国民統合政策から学んだものでもあるということを明らかにした点において、また、第二に同じく大嘗祭を含む「代替り」儀式が決してたんなる文化的伝統といったものではなく、なによりも、国民統合や対外的国威発揚といった、第一級の政治的問題であったということを明らかにしているからである。

三

さて、このように、今回の高木報告が、たんに従来の研究史を埋めたというだけのものではなく、現在進行している「代替り」儀式の本質の解明に有効な論点を提出しえて

いる事を確認した上で、以下いくつかの問題点を指摘しておきたい。

まず第一に、一八八〇年代の「旧慣」保存の流れの歴史的意味の問題である。報告はこの発端を七七・七八（明治一〇・一一）年の明治天皇の京都行幸であり、明治天皇の意向だとしながらも、他方でそれを受入れるだけの官僚側のプランもあったとして、大隈重信と桜井能監の七九（明治一二）年の建議を紹介している。そして、その官僚側の建議には「旧慣」保存と皇室との結び付きによる「国民統治の具とする意図」があったとしている。

問題は次の点である。それはこの官僚側の「国民統治の具」としての「旧慣」保存策が何故この時点に出てきたかということである。それは、結論的に言えば木戸、西郷、大久保無きあとの明治政権の自由民権運動への対抗策として出てきたということである。桜井建議の「今日守成ノ時ニ当」りという文言がそれである。報告でも自由民権運動との関連を言及している部分はあるのであるが、この点の首尾一貫性がかけているように思う。こうして位置づけてみると、この「旧慣」保存策は、例えば七九（明治一二）年の元田永孚の手になる「教学大旨」の成立、学制以来の教育を「欧米的文教政策」ととらへ「仁義・忠孝」を中心とした徳育中心主義への転換もとめたもの等、と同根のもの

であった。また、そうしたものであったためにこうした流れは自由民権運動のさらなる高揚に伴って強まっていく。

「教学大旨」に対しては、激しく反対の論陣をはった井上毅が「明治十四年の政変」以降、「漢学ヲ勸ム」を出し、元田との距離を縮めていったのは象徴的である。

このことは報告で、八二（明治一五）年以降に本格化する岩倉・柳原らによる皇室儀礼の検討が、国内的には「民心収攬」、国際的には「対外的な權威の伸長」の意味を持っていたと正しく分析しているが、それも、一般的な「民心収攬」、「対外的な權威の伸長」ではなく「明治一四年政変」を頂点とする自由民権運動の高揚や「壬午の変」に象徴される朝鮮半島をめぐる対外的緊張の問題など、この時期特有の問題としてもしつかり押えておかねばならないという問題とも関連する。この点が第一点である。

第二に、このようにして、「八〇年代には官民に共通した思潮として、皇室の聖域化とその權威の伸長のための〈旧慣〉保存政策がみとめられる」のであるが、その具体的な政策化の段階では尚、政権内部に大きな対立があったということである。これは岩倉や柳原の官僚内における位置づけにもかかわる点であるが、氏の問題意識が皇室典範の大嘗祭京都挙行条項の成立という場所の問題、それにおける岩倉や柳原の役割の大きさという点に焦点がしぼられた

ためか、この大嘗祭京都挙行を含む皇室儀礼の検討をめぐる官僚内部の対立の問題はあまり意識されていないようである。

この対立は報告に即して言えば、憲法体制・立憲主義と「旧慣」保存のような「古い」制度や儀礼、イデオロギーをどのよううまく「調和」させるのかという問題であり、あるいは法の問題としては、憲法と皇室典範の関連、さらにもう少ししばれば伊藤が憲法の制定にあたって西欧ではキリスト教が機軸になっていたが、日本ではそれは皇室であるとし、仏教はおろか神道までも機軸になりえないと述べたように（「起案の大綱」）、天皇・皇室を機軸に据えるという点では一致しながらもその権威化のために神道的なものをどのように組み込むかという問題であった。そして、この問題は例えば今回の「大喪の礼」の挙行にあたって、鳥居の問題に矮小化されたとはいえ今日においても、支配層内部で対立があったように、いわば近代以降の日本国家の支配の難問なのであり、また、その「調和」、関連のさせ方、組み込み方は、逆にその時々为国家なり社会の段階・特質を照射するものである。

例えば、報告では、枢密院での議論を分析して「一貫して重要なのは、即位式であり、あくまで大嘗祭はつけたりでしかなかった事実である。それは、柳原・井上のみなら

ず枢密院全体が、即位式における国民統合機能を重視したからに他ならない」と結論づけているが、たしかに即位式における国民統合機能の重視は近代の「代替り」儀式の一番大きな特色である（因みに、来秋の即位儀礼をめぐる大嘗祭だけがクローズアップされているが、大嘗祭挙行は国家の原理としては重要な問題であるが、国民統合にとって重要なのは「即位の礼」の方である）。しかしながら、大嘗祭は「つけたりでしかなかった」と結論づけてよいものであろうか。皇室典範の制定過程の詳しい史料を見ることが出来ない以上、何ともいえないのであるが、筆者はむしろ次のように考えた方が良いと考える。

つまり、世俗性の強い、いわばショーとしての性格の強い即位礼とちがって大嘗祭はまさに、秘儀、つまり濃密な宗教儀式、濃密な「神道」儀式である。ところで、筆者の国家神道確立史に引き付けて恐縮だが、先の伊藤の発言に見られるごとく帝国憲法成立段階では天皇と神道をどのように結び付けるのかは尚、未確定のものであった。この段階ではまだ神社神道は完全には国家神道の論理で整備されてなく、例えばそのような状態での元田・佐々木高行らの神祇官再興運動等には井上らは強い不信感と警戒感をもっていた。

また、先の憲法・立憲主義と「旧慣」保存に代表される

「古い制度」や儀礼、イデオロギーをどのようになく

「調和」させるかという問題、あるいは憲法と皇室典範との関連の問題でもあるが、例えば井上は神祇官再興問題に関して「礼典ハ宜シク王家ノ内事ニ属スヘクシテ國務ニ混スヘカラス」と、「國務」と「王家ノ内事」の区別という論理を展開している。

おそらく、即位礼に比して大嘗祭というものがこうした微妙な問題と直接に関わる問題であった、物議をかもし問題であっただけに、井上らエタティストはこの問題の具体的な議論を意識的にさけたということの方が真実にちかいのではあるまいか。したがって、また、報告者は即位礼や大嘗祭の具体的な手順を規定した一九〇九（明治四二）年の登極令への展望を述べる中で、この頃になつてはじめて大嘗祭の独自の位置づけがなされるようになったとしているが、そうではなく、右にみたような大嘗祭を位置づける上でネックになつていた諸問題、つまり神道の問題で言えば、登極令の成立の前年に皇室祭祀令がだされたことにも象徴されるように、この時期における皇室祭祖、国家神道の確立の問題があるし、又憲法と皇室典範の関係、井上の「國務」と「王家ノ内事」に関連すれば、公式令の制定という問題等があつたのであり、報告者がいうように柳田民俗学の問題とは直接的にはかかわりのないものではないだ

ろうか。そして、問題点の一指摘したこととの関連では、こうした背景には、一八八〇年段階とは異なる、日清・日露戦後の段階の新しい国民統合や国威の発揚、つまり帝国主義の問題がよこたわつていたと考えるのである。

いずれにしても、以上に述べた、小生の見取り図は別にしても、一八八〇年代の「旧慣」保存の意味を、もう少し、その時代の固有の諸問題として、その時代の社会や国家の段階や特質を浮掘りにするような方向で議論を進めたならば、「日本の近代化と皇室儀礼」というテーマによりふさわしいものになつていたのではないだろうか。